

## 《報告》

## CSW62 参加報告

*On Attending the Sixty-Second Session of the United Nations  
Commission on the Status of Women (CSW62)*



2018年3月12日から3月23日にかけて、ニューヨークの国連本部で開催されたCSW62（女性の地位委員会）<sup>1</sup>に参加した。以下はその報告と感想である。

### 1. 参加のきっかけと参加まで

私は2017年度秋学期、村田晶子先生の「ジェンダーと教育」という授業を履修していた。授業の中でJAWW（日本女性監視機構）<sup>2</sup>のCSW62若者支援募集のチラシが配布された。私はそれまで学内で「LGBT」をキーワードに活動を行

<sup>1</sup> Commission on the Status of Women、当初は人権委員会の下部委員会だったが、女性たちの働きかけで1946年6月に人権委員会などと同等の国連経済社会理事会の機能委員会の一つに昇格。日本は1957年からメンバーであり、現在45か国が所属している。CSWは政治、市民、社会、教育分野における女性の地位向上に関し、国連経済社会理事会に勧告・報告・提案を行い、同理事会はこれを受けて総会（第三委員会）に対して勧告を行う。

<sup>2</sup> JAPAN Women's Watch、日本のNGO。「北京行動綱領」と「2000年国連総会（北京+5）成果文書」などの実施状況について監視し、日本政府に対して更なる実施に関する提案をすることなどを目的としている。

ってきた。自分自身、その活動を続ける上でも、フェミニズムについて知りたいと考えている時期であったこと、加えて、学内の身近な問題だけでなく、世界のフェミニズムに目を向けたいという思いから、参加を決意した。2018 年年始から、渡航に向けて国連の基礎知識や女性政策について勉強をした。

## 2. 「合意結論」(Agreed Conclusion)

最初に、会議の主軸である合意結論に関して述べておきたい。合意結論とは、CSW62 の成果としてまとめられる文章であり、採択されると、CSW に参加した国々はその文章に賛同したことになる。法的拘束力はないが、規範的拘束力はある。各国の NGO は帰国後、自国のジェンダー政策を進めるために利用できる。合意結論の文言を巡る議論は CSW のメンバー国の政府代表団のみが参加でき、NGO は参加できない。したがって NGO はロビーイング、またはイベントを国連構内で開催することで影響力を行使する。合意結論の進捗は、毎朝のモーニングブリーフィングで NGO に対し報告される。なお、期間中二度、改訂された合意結論案が公開された。

日本の NGO が合意結論に影響力を及ぼす手段として、日本政府代表団との会議が挙げられる。NGO は政府代表者に自分たちの意見を伝えることで、ロビーイングを行い、合意結論の文言に干渉を試みる。私はこの会議で積極的に日本政府代表団に質問した。大学での活動の経験を生かして、LGBTI<sup>3</sup>や HIV/AIDS に関する質問をした。なかでも“Sexual Orientation and Gender Identity, Expression, Sex Characteristics” (性的指向、性自認、表現、性徴) という文言が 3 月 21 日時点 (会議終了 2 日前) まで残っていることを聞き出せたことは、大きな成果だ。

---

<sup>3</sup> 国連では“Free and Equal”というキャンペーンの内容からも伺い知れるようにレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックスの頭文字を取って LGBTI という言葉が使われることが多いため、本稿も原則 LGBTI を使う。

なぜなら NGO の先輩から LGBTI に関する文言は会議の前半で削除される可能性が高いという話を聞いていたからだ。だが、この文言は、ロシアの反対により、最終的には合意結論には残らなかった。

1 週目の会議では、改定された合意結論案に“Sexual Orientation and Gender Identity, Sex Characteristics”の文言があったが、これは各国 NGO からの強い要望があり入ったとことが判明した。また、外務省担当者は話し始める時に真っ先に「ゲイ」ではなく、「レズビアン」という語を挙げ、「バイセクシュアル」と続けたことから、いわゆる“LBT Women”（レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダー女性）というくくりで実際に政府間会議において話題に上がっていることが推察できた。加えて、まだ会議が本格的に始まっていないからなんとも言えないとした上で、“The Family”（母と父と子供からなるステレオタイプな核家族を想定）を“Families”（同性カップルやシングルを含む様々な家族の形態を想定）に書き換えるのは、保守的な国家からの反対があり難しいのではないかという予想が発表された。

2 週目の会議では、政府間会議が進んだため詳細な話を政府から聞いた。“Sexual and Reproductive Health and Rights”（性と生殖に関する健康と権利）に関連しては、アメリカとアラブ諸国の反対で中絶の問題に触れることから、“Reproductive Rights”（生殖の権利）が合意できそうになく、“Sexual and Reproductive Health”（性と生殖の健康）で落ち着きそうとのことだった。

日本政府との会議での質問に際して、自分の関心事を国連の視点から調べ直す機会を得た。CSW でのアドボカシー<sup>4</sup>の基本として、国連の他の文章で使われている言葉を引用して、主張の根拠として使用することが求められる。したがって、国連図書館の資料検索システムなどを利用して言葉を探し、国連の文脈で主張していくという方法をとる。そのための準備は特殊な経験になった。

---

<sup>4</sup> 日本語で「唱道」「弁護活動」などと訳される。自分たちの主張を通すために行う活動一般のこと。

### 3. 各種イベント

サイドイベント<sup>5</sup>、パラレルイベント<sup>6</sup>にも参加した。

「LGBTI」などという文言がイベントに冠されているものでは、CSW が女性にフォーカスを当てていることから、フェミニズムとの連帯を訴えている点が印象に残っている。女性とセクシュアルマイノリティの問題は、似た問題でありながら、相違点も多く、分断されている感覚を抱くことも個人的に多い。両者を橋渡す重要な言葉をたくさん聞くことが出来た。以下いくつかのイベントを紹介する。

① Gender Identity and Expression, Feminism and Empowerment of Rural Women and Girls (性自認と性表現、フェミニズムと農山漁村女性と少女に対する勇気づけ)

このイベントはカザフスタン、フィジー、インドネシアで暮らしている当事者が、座談会形式で自分の国について話すイベントだった。その中でフェミニズムについて触れている部分が面白かった。「誰があなたの仲間か？」というテーマで話している時に、「女性運動は強力な仲間になる、フェミニズムとLGBTコミュニティは友人である。」という話があった。「相違点も多いが私たちは共通点も多い。共に歩んでいこう。」と、連帯を呼び掛けていたのが印象に残った。

他には、コミュニティは都会にしかなく、田舎や郊外は孤立してしまいがちなので、インターネットで安全な情報にたどり着けることが大切である、とか、生きるために田舎から出てきたトランスウーマンが、身分証明書もなく、お金もないためにセックスワークにつかざるを得ないといった話などは、日本とも共通するところがあると思いながら聞いていた。

---

<sup>5</sup> 国連構内で開催されるイベント。NGO と共催のこともあるが、主催者は各国政府のため、各国政府の女性政策アピールの場でもある。

<sup>6</sup> 国連構外のニューヨーク市内で開催される NGO 主催イベント。政府の干渉がないため、自由度が高い。告発の場になることもある。

## ② Human Rights Principles for the treatment of LGBTI Rural Women and People

(レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックスの農山漁村女性と人々の取り扱いに関する人権の原則)

紛争地域での LGBTI の取り扱いについてのイベントだ。紛争地域のセクシュアルマイノリティは、過酷な状況下で、声を上げることもできず、他の人となることができない。紛争という状況が女性や子供にとってひどい脅威であるのと同じように、日頃脆弱な基盤で生活している LGBTI にとって、より一層過酷な状況をもたらす。こうした LGBTI への暴力や女性の殺害 (Femicide) は、国家や地域単位で発生しているので、各国家の中で取り組むというよりも、まずは国際社会に助けを求めなければならない。他のイベントでは、女子差別撤廃条約や北京行動綱領といった確定した国際的な枠組みがあるため、ジェンダー平等を地球規模で実現するために、あくまでも地元の NGO と政府が地元の問題を解決するといった姿勢のイベントがほとんどだった。一方、CSW の中で LGBTI の問題を取り上げる人々は、国内での厳しい状況を変えるために国際社会に訴えているという側面があると感じた。女性は、どれだけ保守的な国であっても、ジェンダー平等に取り組んでいかなければという最低限の建前があるが、LGBTI に関してはそうではない、ということ再認識せざるを得なかった。

そんな中、このイベントでは力強いスピーチを聞いた。支援の前提として実態把握のため、データを集めなくてはならないという文脈で、女性への暴力は地元で女性団体があるから把握可能で支援できる。一方、LGBTI への暴力は実態がつかめない。そのうえで、「私たちがジェンダーに基づく暴力について語る時、傘を広げなければ世界は変わらない。ゲイかどうかで殺されているのではなく、見た目が少し女性っぽいやから殺された。女性の支援団体がいるから女性の虐待の数は把握できるが、他のジェンダーに基づくデータがわからないというのはおかしい。これはジェンダーの問題だ。これはジェンダー表現の問題でもある。情報を精緻化しなければならない。これは拷問の問題でも、殺人の問題でもあるが、それだけじゃなくてジェンダーの問題なんだ」。印象に残る訴え

だった。

フェミニズムは「女」に取り組む運動であり、あらゆる性の在り方を相対化し、同じ土俵に乗せることで見逃してしまう問題があるため、フェミニズムは簡単にジェンダーイズムにはしてはならない。しかし、LGBTI の問題は、フェミニズムが取り組むべき構造的問題とある程度重なり合っていることから、フェミニズムはともにこの問題に取り組んでいくべきと感じた。何より話者の「フェミニスト、無視しないで！」という強いメッセージに胸を打たれた。

「LGBTI」と冠されていないイベントでも、多くのイベントで「LGBT」や「レズビアン」といった言葉を聞いた。SDGs<sup>7</sup> の「誰一人取り残さない」(“No one left behind”) というスローガンではないが、性的指向と性自認が当たり前のようにインターセクショナリティ (Intersectionality 交差性) の一つとして、暴力や性教育、貧困と教育の問題で取り上げられていた。

性的指向・性自認だけでなく、インターセクショナリティに配慮しようとする姿勢が会の至る箇所で見られた。モーニングブリーフィングでは、度々年配女性や寡婦について言及されていたのも印象深い。ゲイであるというアイデンティティが強いある友人と話していると、「誰一人取り残さない」という姿勢はともすると自分のエゴなのではないか、という気持ちになる時もある。「同性婚だけ実現しても、夫婦別姓やシングルへの偏見はどうなるの？そもそも結婚制度が女性差別的なイデオロギーと結びついていないか？」という話をすると、それよりも今困っている同性カップルはどうなる、全部解決するのを待っていたら永遠に解決しない、ということを言われて私は悩んでいた。今回 CSW に参加して、やはり「誰一人取り残さない」マインドの重要性を再認識した。

### ③ Ending Gendercide (性に基づく虐殺を終わらせる)

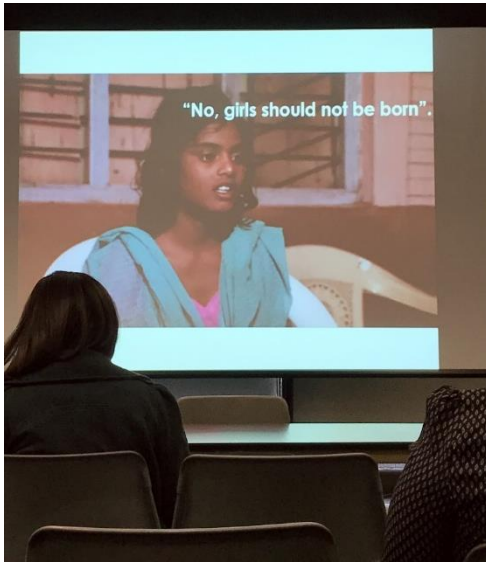
LGBTI に関連しないが、印象に残ったイベントがある。インドでは女性より男性が約 3700 万人も多い。これは女の胎児が選択的に中絶されていることや、

---

<sup>7</sup> Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標。2030 年までに世界規模で達成することに合意している 17 のゴールのこと。

幼児の段階で殺されてしまうことが影響していると考えられている。こうした女の子<sup>8</sup>の殺害を **Gendercide** (性に基づく虐殺) という。イベントは、洗濯機に女児が入れられ殺害されたという新聞記事の紹介から始まった。

インドには「ナクーシャ」と名付けられた女の子が多数いる。ナクーシャはインドの言葉で「望んでいない」という意味だ。紹介された映像のなかでインタビューを受けた「ナクーシャ」は、女の子は生まれるべきか?という質問に「女の子は生まれるべきではない。」と答えた。その子の父は、「彼女を誰かにあげたらいい」と言い、母親は、「女の子は必要ない、とにかくいらぬい。」と話した。女の子の自己肯定感はなく育たず、学校に行くという発想もない。国



道沿いの中絶センターの壁には、「今日の 500 ルピーで、5 万ルピー節約できます!」という広告がある。インドには「女の子を持つことは他人の庭に水をやるようなものだ。」ということわざもあるという。

こうした文化の一因に、高額な嫁入り金 (Dowry) の習慣がある。嫁入り金は非常に高額であり、少額しか持参できない場合は嫁入り先の家族から虐待を受けることもある。こうして結婚

した女の子には、無数の義務が待っている。これらの解決のため、国は Dowry free area (嫁入り金無料地域) を作り、減額するように呼び掛けている。

発表者は、嫁入り金の減額のためには、直接的な政策だけでなく、教育と金

<sup>8</sup> 女の胎児、女兒、成人未満の女性を包括して指す語として、以下「女の子」を“girls”の訳語として使用する。

銭的自立を女の子に対して提供することも必要であると考え。特に経済的自立のために雇用をすることは、「評価される」という経験をしたことがない女の子たちに、「評価される」という経験を提供することにもなる。

構造的に大量の女の子が殺されており、それはその地域の文化と経済に組み込まれてしまって不可視化されている。発表した NGO のメンバーは、女の子たちを救うには地域の外の人の力が必要であり、まずはこの「見えない」存在を見てほしいと強く訴えていた。質疑応答では、「私が見えない女の子が大人になった姿です」と名乗りをあげ、自分の体験を話すインド出身の方も現れた。アフリカの問題を語るイベントは多いが、インド、アジアの問題を語るものは少ない中で、インドの状況を国際社会に訴えていてとても印象的だった。なにより、自分は生まれるべきでなかったと話す女の子のインタビュー映像が忘れられない。

イベント全体を概観すると、アフリカの存在感があった。アフリカからの参加者は、色とりどりの民族衣装を着て参加している方が多く目立つ。あるイベントで聞いた、「私は国なんて信じていない。国はイギリスに引かれた国境で分けられたものだから。アフリカは一つ。アフリカの女は、女の苦しみに対して女として立ち上がらなければならない。どのアフリカも置き去りにしてはならない。」という旨の演説が忘れられない。さらに、そのすぐあとに、「ラテンアメリカを忘れないで」と民族衣装を着た方が批判のコメントを述べた。「誰一人取り残さない」の精神は、こうした批判と既存の進め方の見直しの中で発展するのだと実感した。ラテンアメリカ同様に少ないのがアジアであると感じた。今回は Rural Women（農山漁村女性）がテーマであり、東南アジアも含めアジアがもう少し存在感を示してもおかしくないのにもかかわらず少なかつたことから、ひろくアジアで女性が声を上げることに高いハードルが残っていることが推測される。



#### 4. 人との出会い

CSW の重要な要素の一つとして、人との出会いがある。国連で活躍する日本人女性の方、世界を活動の場とするフェミニスト、日本で活動するフェミニスト、同世代の若者などなど多くの方々との出会いや、その中で得られた言葉が、CSW で得たもののなかでも重要な一つになっている。いくつかの出会いを紹介する。

CSW 中にお会いしたたくさんの人の中でも、中満泉さん（国連事務次長・軍縮担当上級代表）とお会いできたことが本当にかげがえのない経験になった。私は国連事務総長のアントニオ・グテーレスさんがジェンダー問題に特に関心をはらい、CSW の開会式でも自分はフェミニストだと述べたことに触れ、ジェンダー平等実現のために男性が果たすべき役割は何か、と質問した。中満さんは「誰か、つまり男性はこの状況を変えてくれない。今、ここにいるあなた方が変えなければならない。」と答えた。国連内のジェンダー平等政策については、「グテーレスさんの前からパリテの発想があったが、グテーレスさんが変わってから、より一層意識して努力するようになった。特に安全保障の分野は男性が多かったので、分野に関わらずパリテを実行しようという方向に動いた。ジェンダー平等は、気持ちでは変えられず、現場に任せていては実現できないので、男性というよりは、上に立っている人間が率先して変えていかなければならない。例えばスウェーデンは、選挙制度が比例代表制だが、政党が各自に名簿を男女交互にするルールを設けていて、ジェンダー平等を実現しようとしている。このような思い切った政策がなければ、スローガンを設定するだけでは状況は変わらない。そういう戦略的なことをあなたたちがやっていくんだよ。」と、中満さんはその場にいた日本から来た若い女性である私たちに伝えた。

今でこそ中満さんは国連構内で勤めていらっしゃるが、キャリアは旧ユーゴスラビアで現場の職員としてスタートした。当時、女性職員はほとんどいなかったため、日常生活が大変だったと話した。一方で、現地の方との交渉の場面

などで、自分が女性であることに意外性があったために上手くいくこともあったと話し、意外性は使いようによってはプラスに転じることもあるという。

たった 30 分の時間だったが、中満さんから直接お話を伺うことができ、今後のキャリアを考える上で指針になる経験をできた。中満さんと出会い、日本の女性の地位を高くしたいという気持ちを強くした。

国連の統計局に勤めていらっしやった大崎敬子さんにもお話を伺った。印象的だったのは、キャリア形成において専門性が重要であるというお話だった。国際的に活躍したいなら、専門性がないと活躍できない。語学を学ぶ面では即効性があるから海外の大学を勧めるが、日本の大学でも最低マスターは出ていないと難しい、と話した。国連職員になるのに博士は必須ではないが、職員の半分以上が博士を持っている。大崎さんは研究休暇を取得して 3 か月で論文を書き上げ、博士号を取得した。日本人国連職員の中で女性職員は 7 割を超え、差別がなく働きやすい職場であるから日本の若い女性にはぜひ国連を目指してほしいと教えてくれたが、女性は男性に比べてチャレンジする気持ちが弱く、男性の方が野心的であるような気がするとも話していた。

他にも大崎さんは、統計局の働きや NGO との関係で悩んだこと、CSW はもっと NGO の人の声を聞くべきだし、国連職員はそのためのシステムを作るべきだということ話を話した。大崎さんとは、1 時間以上もお話しする時間を得られたので、ライフヒストリーからキャリア指導まで幅広いお話を聞くことができ、まさに国連職員の生きた声を聞いた貴重な経験になった。また国連の仕事のなかで、いかに統計が大きな仕事であるか知ることが出来た。国連の公式文章には、数値目標やその計測方法が定められているが、それを採択するための大前提となる仕事をしているのが国連の統計局なのだ。大崎さんとお会いして一段と視野が広がった。

中満さんと大崎さんから得たパワーしかり、CSW での人との出会いは自分のキャリアについての考えを再検討し、そのキャリアへの道を歩きだすための確かな力になった。中満さんの言葉を聞き、日本で働こうという決心につながっ

た。大崎さんとの会話を通して、専門性を磨いてキャリアを築こうという指針になった。JAWW のメンバーで、私のような若者支援者のメンターである草野さんとの会話を通して、現状に対する自分の怒りは間違っていないと思えた。この出会いを通して得た力を糧に、自分のキャリアを築いていきたい。

また、CSW の各種イベントでアドボカシートレーニングを受けた。教師は国際的に活躍するフェミニストだ。アドボカシートレーニングでは、どの立場で（政府か国連職員か NGO か）、どのレベルで（地域、国、国際的地域）、どういった枠組み（女子差別撤廃条約、SDGs、北京行動綱領など）を利用して何をするのか、を徹底的に考えることを教えられる。この作業を通してロビーイングの戦略を立てることが出来る。こうしたアドボカシートレーニングも、自分のキャリアを考える際の道具になった。CSW は、いくつもの知識や物語を伝えてくれるだけでなく、戦略や方法論を伝えてくれる場所でもあった。

## 5. 結びにかえて

以上が、CSW62 に参加して感じたことの一部である。

滞在中は国連だけにとどまらず、アメリカやニューヨークという土地の面白さを実感した。テレビ CM や街頭の広告は、ポリティカルコレクトネスに配慮しているし、おもちゃ屋さんに入れば、女兒の STEM<sup>9</sup>教育を進める教材や人種配慮したおとぎ話の絵本が置かれていた。例えば、アフリカ系に見えるラプンツェルの絵本を見かけた。飲食店の入口には何気なくレインボーのシールが貼られているし、ミュージカルに出てくるゲイのキャラクターはステレオタイプに収まらない表象がされていた。私が毎朝国連に向かう前に見ていたニューヨ

---

<sup>9</sup> “Science, Technology, Engineering and Mathematics”の頭文字をとった言葉で、科学・技術・工業・数学の分野に女性が少ない状況を改善すべく、男児向けのおもちゃだけでなく女兒向けのおもちゃにもそういった分野に関心を持つような工夫が為されている。



ークのローカルテレビ局のニュースでは、州知事選にレズビアン候補者が出たと伝えていた。休みの日を利用して、ストーンウォール事件<sup>10</sup>の現場となったストーンウォールインを見学に行った。さらに、“The

Center”という名称の立派な LGBTQ のコミュニティセンターにも足を運んだ。中には、性的指向や性自認を理由に迫害され、世界中からアメリカに亡命した人のライフストーリーが語られた展示があった。また、かつて同性間の性行為が犯罪とされていたことを皮肉るキース・ヘリング（1958-90）のアート作品なども興味深かった。

とはいえ、多くの米国のフェミニストがトラウマのように語っていたように、ドナルド・トランプを大統領とする国でもある。彼の政策により複数の NGO の人にビザが発給されず、CSW に参加できないという事態も発生していた。モーニングブリーフィングでは、国連はアメリカに対して何をしているんだ、といった意見も飛んだ。トランプに対しては、おもちゃ屋・雑貨屋・お土産物屋の店頭で揶揄するようなグッズが複数置かれていた。国連の向かいや、マンハッタンの中心にあるトランプタワーの周辺では、連日何らかのデモが開催されていて、政権への批判を目の当たりにした。

---

<sup>10</sup> 1969年6月28日に発生した「ストーンウォールの反乱」の現場。LGBT コミュニティの数少ない味方であった女優ジュディ・ガーランドの死に沈んでいたゲイバー「ストーンウォール」に警察が踏み込んだ。客はこれに激怒、瞬く間に暴動になった。

CSW 参加は、私にとって多くの学びを得、人との出会いを得、これからを生きていくための勇気を得たかけがえのない機会になった。

〔参考文献〕

マラ・セン 島居千代香訳 『インドの女性問題とジェンダー』明石書店、2004年

堀越英美 『女の子は本当にピンクが好きなのか?』ele-king books、2016年

牧村朝子 『ゲイカップルに萌えたら迷惑ですか?』イーストプレス、2016年

JAWW 活動目的・事業 最終閲覧 2018年12月12日

<https://www.jaww.info/aboutja.html>

UN Free & Equal 最終閲覧 2018年12月12日 <https://www.unfe.org/>